

日中経済交流研究会新聞 日中経済交流研究会 10月例会報告 この状況下でも 攻めの姿勢は崩さない

報告者 道頓堀ホテルグループ 株式会社 王宮
専務取締役 橋本 明元 氏

日時 令和2年10月8日(木)

場所 道頓堀ホテル / 参加人数 62名



順調すぎるほどの業績から一転苦難の道へ

橋本さんは中国出身の祖父が始めたホテル業を引き継ぎ、ここ数年のインバウンドの勢いで成長し、ホテルを新設するなどさらなる業績の拡大を続けてきました。

自分と会社の使命は、サービスを通して外国の人に日本のよさを分かってもらうことであると考え、世界と日本のかけ橋になることをモットーに、宿泊客の大半である外国人観光客へのおもてなしを全面に押し出し、国際電話をはじめ多くの無料サービスを実施して顧客の増加を着実にしてきました。

しかし今年に入って1月初めから新型コロナウイルスの世界的な蔓延で様相が一変します。

その危機はまず1月中旬のキャンセル続出に始まり、2月には団体客の旅行が次々に中止され、状況は悪化の一途をたどり、宴会も3月以降ほとんどがキャンセルになっていったといいます。

打開しようと自ら韓国、台湾など東南アジアに出向きましたが一向に事態は好転することなく絶望の淵に立ち、3月中に3軒のホテルのうち2軒を休業、3月末にはメインの道頓堀ホテルを4月以降休業することを全社員とアルバイトに苦渋の中で告げ、4月10日にホテルを休業しました。

大きな決断と社員との絆で打開の道を模索

大企業では、企業の業績悪化のツケをリストラ人員削減で乗り切ろうとするのが通常です。しかし橋本さんは違いました。社員・アルバイト合わせ約300名の給与を満額支給としました。社員らの生活を最優先にする選択をしたのです。コロナ禍で休業を余儀なくされ壊滅的な打撃を受け、頼みの外国人の往来が許されないという環境の中で、ホテル業界では異例の措置を実行。

資金面では金融機関からの借入はできましたが、それでも以降毎月数千万単位のキャッシュが消えていく事態が続く、橋本さんは事業の存続を心配し眠れない日々が続きます。

休業中は何も手に付かない時期もあったようですが、思い直し、社員と共にこの時期にしかできないことをすすめると気持ちを切り替えます。社内コミュニケーションを徹

底することで社内を引き締めて意思統一を図ります。

3月の管理職候補勉強会で休業中の生活指針を導いたことに続き、7月の管理者研修では行動指針20項目を作成し、その後もその項目の中身を分かりやすくした副文まで作り上げて全社員とアルバイトが同じ指針を共有できるようにしました。

攻めの姿勢は崩さず「明けない夜はない…」

どんな境遇になっても攻めの姿勢は続けようと橋本さんは誓っています。

赤字が続く日々ではありますがこの時期にしかできないことがあるはずと考え、どうしても普段でできなかったホテル内のリニューアルを敢行しました。費用は発生しますが、それにより社員も気持ちよく誇りをもってお客様を迎えられます。

利益の足しになるわけではないのですが、社員やバイトスタッフたちが仕入れ関係を維持するため弁当の販売も始めました。笑顔で販売する社員の顔を見ていて、幸せは仕事を通じて得られるもので、人には働く場が必要で、人は人の役に立つことが大切なのだと橋本さんは改めて知ったといいます。「継続してきた新規採用を今年は見送るのが当然とも考えましたが、人あつての事業だと思い直し今年も外国人も含め7名採用しました」と橋本さん。

橋本さんは物事を他責にしないという信念を大切にしています。うまくいかないことを自分以外の責任に転嫁しては、自分の成長はないと考えているそうです。「振り返ると事業が順風満帆の倍々ゲームの絶頂期には天狗になっていた。しかし今回こんな事態になってかえってよかったかもしれないと思うようになった」とも話していました。

「悪い時期はいつまでも続くわけではない。明けない夜はない、しかし暗い夜にただ嘆くのではなく自分を奮い立たせ努力することが大事。夜にしかできないことをやる。そうして頑張った人のみが夜が明けた時の喜びを人一倍感じることができるのです」と締めくくり、感動の報告を終えました。

(取材・文章：日中経済交流研究会 広報委員会)